

22) 興味ある画像を呈した Von Meyenberg Complex の 1 例

畠山 重秋・植木 淳一
石塚 基成・阿部 惇 (新潟県立中央病院)
村川 英三 (内科)
高木健太郎・小山 高宣 (同 外科)

肝細胞癌との鑑別が困難であった Von Meyenberg Complex の 1 例を経験した。症例は 59 才男性。HCV (II) 陽性。CEA 8.7 ng/ml, γ -GTP 118 IU/l と軽度異常を示した。CT にて、S₆₋₇を中心に LDA が多発し、diffuse type HCC と診断した。US では、S₆を中心に、肝内 high echo の散在を認めた。腹腔動脈造影では、同部位に一致した hyper vascular lesion の集簇を認めた。早期胃癌を合併していたため開腹術施行。肝表面は $\phi 2 \sim 5$ mm 程度の白色～黒かっ色ののう腫状小結節が散在していた。肝生検組織像では、線維性の間質を伴うのう腫状に拡張・蛇行した肝内胆管の集簇を認めた。本症は一般に無症状で経過するとされるが、ときに胆管細胞癌を合併するとされ、また本例は興味ある画像を呈しており報告した。

23) 経過が追えた高分化型肝細胞癌の 1 例

田辺 嘉也・新井 太
高橋 達・市田 隆文
野本 実・上村 朝輝
朝倉 均 (新潟大学第三内科)
薄田 浩幸・根本 啓一 (同 第二病理)

近年高分化型肝細胞癌の組織的特徴が示され早期診断が可能となったが、今回我々は 1986 年から 6 年間の長期にわたって経過観察し得た高分化型肝細胞癌の 1 例を経験したので報告する。本症例は超音波検査でのみ病変の存在が示唆され、後に血管造影上も肝細胞癌に特徴的な所見が得られた。組織的には細胞密度の増加、核の類洞側への偏位、胞体の淡明化といった所見が認められ初期の高分化型肝細胞癌と診断できる症例であった。その後並存する肝硬変の進展とともに肝細胞癌は血管造影を含む画像診断で進行性の様相を示し、エタノール局注療法や経カテーテル的腫瘍血管塞栓術を繰り返した。最終的には肝不全及び上部消化管出血にて死の転期をとった。剖検では中分化型肝細胞癌の所見であった。

24) 12 回の TAE により 5 年 4 カ月生存している多結節型肝細胞癌の 1 例

太田 宏信・松井 茂
石川 直樹・本間 明 (済生会新潟第二)
尾崎 俊彦 (病院消化器内科)
武田 敬子 (同 放射線科)
石原 法子 (同 病理検査科)
秋山 修宏 (木戸病院消化器)
荒川 謙二 (内科)
市田 隆文 (荒川クリニック)
(新潟大学第三内科)

症例は 45 歳男性。B 型肝硬変として経過観察していたところ昭和 63 年 11 月肝腫瘍を指摘。各種検査により多結節型切除不能肝細胞癌と診断し、約 1 年間で 5 回の TAE と 2 回の LAK 細胞動注療法を施行した。その結果腫瘍は著明に縮小し、PIVKA-II は 3,350 から 93 ng/ml と著減した。その後 1 年に 2 回のペースで TAE を繰り返したが、治療 3 年目頃より効果不十分となり PIVKA-II も上昇してきた。平成 5 年 1 月右肝動脈は閉塞し 13 回目の TAE はできなかった。

25) 当科で経験したインターフェロン (IFN) 療法の副作用についての検討

—IFN 投与中に甲状腺機能亢進症を合併した C 型慢性肝炎の 1 例を中心に—

曾我 憲二・佐藤 栄午
畠山 眞・豊島 宗厚 (日本歯科大学新潟)
相川 啓子・柴崎 浩一 (歯学部内科)

C 型慢性肝炎に対する IFN 療法が確立されつつあるが、それに伴い IFN による種々の副作用の報告が目まぐるしくされている。今回我々は C 型慢性肝炎に対する IFN 療法の副作用について検討し、またその中で IFN 投与により甲状腺機能亢進症を合併した稀な 1 例を経験した。対象は C 型慢性肝炎 30 例。IFN の種類、投与方法の如何にかかわらず当科で経験した IFN による自覚症状の副作用は、発熱、頭痛などのインフルエンザ様症状を全例に、発疹は 1 例、また精神症状のうち不眠を 4 例に認め、また、糖尿病の悪化、甲状腺機能亢進症の合併を 1 例認めた。諸外国の報告では IFN の投与により 2 から 18 % の頻度で甲状腺機能異常が報告され、外国では決して稀な合併症ではないが、日本では IFN の投与による甲状腺の異常は極めて稀で 0.3 % と報告され、症例報告として散見されるに過ぎない。